

第152回 令和8年1月9日（金）

「クマとの共存を考える。」

三毛別事件（さんけべつじけん）は1915年（大正4年）12月9日から12月14日にかけて、北海道苦前郡（三毛別地区）で発生したヒグマによる襲撃事件です。三毛別地区は大正期の北海道開拓地の一つで、農業や林業を営む開拓民が生活していました。

体長約2.7メートル、体重340キログラムとされる巨大なヒグマが三毛別地区に出没し、人家近くに現れ、農作物や備蓄していたトウモロコシを食い荒らしました。

開拓民の家の周辺を徘徊していたヒグマは、大和家（村内の一家）に侵入。そこで昼食を取っていた女性を襲い、命を奪ったうえで家の中を荒らし、山へ逃げていきました。

さらにヒグマは開拓民たちが避難していた家を襲撃。女性や子供が捕まり命を奪われました。避難していたはずの家の襲撃だったため、村全体が恐怖に包まれます。

村民たちは、地元猟師らを集めて討伐隊を組織。ヒグマを捜索し、大掛かりな討伐活動を展開しました。最終的に三毛別地区の開拓地近くの森でヒグマを射殺することに成功しました。しかし、その犠牲は想像を絶するものでした。

被害の規模は死者7名（女性や子供を含む）で村は壊滅的な恐怖に陥り、多くの開拓民がこの地域から移り住むことになりました。

ヒグマはいままでは臆病で人間から逃げる習性がありました。この事件ではヒグマが何度も民家を襲いました。一説には、ヒグマが冬眠できない状態（餌不足や季節の狂い）が背景にあった可能性があるとされています。

この事件は日本の自然災害・動物害の中でも特に象徴的な事例です。野生動物が人里に降りてくる理由（餌不足、生息地の減少など）を理解し、共存するための環境整備が必要ということがわかりました。この原因の一つに人間による環境破壊があります。

背景の一つとして、開拓地の拡大が挙げられます。森林伐採や農地開拓がヒグマの生息地を侵食し、餌不足や人間との接触を引き起こした可能性があります。エサとなる生ごみや農作物の適切な管理や、森林地帯ではヒグマを避けるための知識を獲得することや装備を用意すること、地域や自治体でのヒグマの監視と警戒態勢を整え、動物観光や餌付けの危険性を認識することが大切です。

人間の領域と自然の領域を分けることの必要性とともに人里近くで野生動物が増えている場合、どのように人間と自然の適切な距離を保つかを考えなければなりません。